

多様な「解釈」を楽しむ俳句の授業 ——俳句指導の類型化の問題点を考える——

石 塚 修

1 はじめに

国語教育における「俳句」の授業については多くの研究・実践がある。その中には新しい視点からの実践も多くなされている⁹⁾。しかし、その一方に、非常に無味乾燥な「類型化」した「俳句」の授業が教室で展開されている事実もあるようである。私がかつて実施した次のようなアンケートへの生徒の回答A～Gからも、「俳句」の授業がある面で「類型化」に陥っていることを、十分に推測することができる。

問 この授業で「俳句」を学習してみて、これまで自分で感じていた「俳句」の印象が変わりましたか。

はい/いいえ

「はい」とした人はどのように変わりましたか。

調査対象 筑波大学駒場中学校 2年生 男子118名

調査日 平成7年11月

A 小学校の時は「俳句」という言葉の次に「季語を覚える」ということがすぐに頭に浮かんだが、「俳句を読む」ということは俳句の奥にある作者の気持ちを読みとり、また俳句から頭の中にイメージをつくるなどして楽しむものであるという新しい認識ができた。

B これまでは季語文法のチェックが授業の大半だったため、どのような俳句が良い俳句か全く分からなかったが、今回の授業で俳句の芸術性が少し分かったような気がする。

C 小学校の俳句の授業では、著名な人の俳句を読んで、その感想を述べたりするだけだったが、今回の授業で、俳句(定型・自由律)の生い立ちや作者によるものとのらえ方の違い、またくわしい解釈などを学んだり、「甘納豆シリーズ」のようなユニークな俳句に出会えたりとか、そういう点で印象が変わった。

D 小学生の時の塾の俳句の授業は、季語や形式を答えるという単純な「作業」だったが、この授業は内容を追究するという点でおもしろかった。また、季語の原点や俳句の歴史などの知識を得ることができ、良かった。

E 俳句の授業をやると聞いて、また俳句といえない俳句をつくらなくてはいけないのかとうんざりしていたが、つくらなかったのでよかった。また「甘納豆シリーズ」題材にとっていろいろなことをやり、おもしろくてよかった。でも、もっともついろいろな人の作品をとり上げてほしい。

ここにあげたA～Eまでの生徒の意見を一覧すればわかるように、生徒が「俳句」を学習する場合は硬直化し、生徒自身が自由に主体的に入り込んでいけるような状況になっていない事実を指摘できる。118名の生徒を対象に調査して、その中で「いいえ」と答えた生徒はたった1名のみであった。アンケートを記名式にしたという条件をさし引いて考えたとしても、かなりの生徒の意識の中で「俳句」の学習は「類型化」した「つまらない」ものだという認識が定着してしまっていると言っても過言ではない。そう考えると、

F これまでは絶対に五・七・五で、自然のものだけを素材にして、気難しいおっさんが読むものだと思っていたけど、そういうものにとらわれずに、自由に書くこともあって、それによって俳句という世界が拡張されているということに気づきなかなかおもしろそうだと思うようになった。

G 今まで俳句という物は、一部の限られた人だけが楽しむ物という感じがあり、とっつきにくかった。また、良いとされている俳句のどこが良くて、素人の作った俳句とどう違うのかということがよくわからなかった。

しかし、今回実際の俳句だけではなく、俳句がどう成り立ちどのように移り変わってきたのかということが、俳句の中の一語にこだわって読み取ることによって、俳句という物が、詩として感じられるようになり、少し分かったように思える。

といった、F・Gのような生徒の意見もけっして例外ではないといえよう。つまり、生徒たち自身にとっての「俳句」は言語としてかなり遠い存在であり、自分たちの言語生活の範疇にないものであって、国語の学習の「ために」存在しているものにすぎないとして捉えているといえるだろう。ただし、ここではそのように形骸化した存在である「俳句」それ自体を国語教育に残しておく必要はないのだなどという廃止論を述べるつもりはない。なぜなら、「俳句」が日本人にとっての言語感覚の根幹をなす「五・七」のリズムにより成り立ち、現在アメリカなど諸外国でも広く受け入れられつつある状況も考えた時、今後の国際社会に生きる生徒たちにとって、「俳句」をむしろ日本語を考えるうえでけっして軽視できない存在として扱うべきだと考えるからである²⁾。

では、「俳句」の授業を活性化し、生徒に不可欠の言語表現として認識させていくにはどのような方法が考えられるか。AからGにあげてきたような生徒の「俳句」に対する先入観の実態をふまえて、どのような授業の工夫がなされればよいのだろうか。「俳句」というものが過去の国民的文化遺産としてここにあるから知っておくべきだ、というような教師の側からの一方的な指導でなく、生徒の中から「俳句」の存在そのものに深く興味関心を抱けるような方向での授業の組み立てをなんとか工夫することはできないものなのだろうか。教師主導型の解釈・鑑賞にとどまらず、それをもう一步踏み込んで生徒の中に「俳句」への新しい認識を育てる授業、すなわち生徒自身が「表現に向かいあう」姿勢を育てていけるような授業はできないものなのだろうか。今回の実践は、そこに主眼をおいて試行してみた。

II 授業の前に

生徒のなかの「俳句らしさ」とはどのようなものか。まず、その実態をとらえた上でなくては、生徒に「俳句」の新たな認識を喚起するような授業は展開できないと考えた。それではどのようにすればその実態を表面化させることができるだろうか。そこで、現在実際に中学校の教科書に収録されている67句を対象として、どの句を「面白い」「つまらない」「わかりやすい」「わかりにくい」「俳句らしい」と感じるのかを調査してみた。「俳句」は中学3年生の単元として扱われるのに、それを2年生段階で調査するのはどのような意味があるのかという疑問もあるだろうが、ここではあえて生徒が教科書などの影響を受けない時点を考慮に入れて2年生という時期を選んできた。

その結果が(表1)である。(表1)の結果を、各調査項目別に簡単に整理してみる。

[面白いと感じた句] 5名以上が選んだ句

24	高浜虚子	春風や鬨志いだきて丘に立つ	11
50	橋本多佳子	いなびかり北よりすれば北を見る	9
9	尾崎放哉	こんなよい月を一人で見て寝る	8
34	坪内稔典	桜散るあなたも河馬になりなさい	6
44	中村草田男	万緑の中や吾子の歯生え初むる	6
3	飯田蛇笏	をりとりてはらりとおもきすすきかな	5

[つまらないと感じた句] 5名以上が選んだ句

30	種田山頭火	夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ	16
35	坪内稔典	三月の甘納豆のうふふふふ	15
34	坪内稔典	桜散るあなたも河馬になりなさい	12
28	種田山頭火	分け入っても分け入っても青い山	7
36	坪内稔典	十二月どうするどうする甘納豆	6
9	尾崎放哉	こんなよい月を一人で見て寝る	6
29	種田山頭火	歩きつづける彼岸花咲きつづける	5

〔わかりやすいと感じた句〕 5名以上が選んだ句

35	坪内稔典	三月の甘納豆のうふふふ	18
50	橋本多佳子	いなびかり北よりすれば北を見る	17
9	尾崎放哉	こんなよい月を一人で見て寝る	15
34	坪内稔典	桜散るあなたも河馬になりなさい	14
66	山口誓子	一点の偽りもなく青田あり	8
30	種田山頭火	夕立やお地藏さんもわたしもずぶぬれ	7
47	中村汀女	咳の子のなぞなぞあそびきりもなや	6
39	永田耕衣	友来たるもっとも暑き夕べかな	5

〔わかりにくいと感じた月〕 5名以上が選んだ句

35	坪内稔典	三月の甘納豆のうふふふ	18
34	坪内稔典	桜散るあなたも河馬になりなさい	8
37	坪内稔典	水中の河馬が燃えます牡丹雪	7
1	秋元不死男	鳥わたるこきこきこきと缶切れば	6
31	坪内稔典	一月の甘納豆はやせてます	6
41	中村草田男	少年の見遣るは少女鳥雲に	6
33	坪内稔典	河馬を呼ぶ十一月の甘納豆	5
65	山口誓子	かりかりと蠟螂蜂の(かほ)を食む	5

〔俳句らしいと感じた句〕 5名以上が選んだ句

57	水原秋桜子	啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	16
3	飯田蛇笏	をりとりてはらりとおもきすすきかな	10
44	中村草田男	万緑の中や吾子の歯生え初むる	10
54	正岡子規	いくたびも雪のふかさを尋ねけり	9
56	松本たかし	山清水ささやくまに聞き入りぬ	7
23	高浜虚子	桐一葉日当りながら落ちにけり	6
56	松本たかし	山清水ささやくまに聞き入りぬ	6
4	飯田蛇笏	芋の露連山影を正しうす	5
43	中村草田男	葡萄食ふ一語一語の如くにて	5

という結果であった。さらに生徒が選び出した「俳句らしい」句の中から、5名以上が選んだ句、8句をそれぞれどの部分に「俳句らしさ」を感じたのか調査した結果が表2である。表2をながめてみると、生徒がどのような表現を「俳句」の表現としてとらえているかがうかがえる。とらえているというよりもむしろ生徒がこれまで受けてきた国語教育のなかで、こういう表現こそが「俳句」なのだ、「教え込まれた」という方がふさわしいのかもしれない。たとえば、

57 水原秋桜子 啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々
の句にしても、「切れ字」「擬人法」「体言止め」といった用語にすぐにとらわれた読み方をする生

徒が多い。鑑賞の例にあげたようなあくまで表現として読もうという姿勢が乏しいように見受けられる。「俳句」を授業で扱っていくとき、「俳句」の独特の表現に注目させる必要性があることは否定できない。しかし、その表現を一語のもとに統一して形式化してしまうことに問題はありはしないだろうか。たとえば鳴鳥 甫がいう。

ところで今日の高校国語教育においては、評論、小説、詩、短歌、俳句といったジャンル別に指導していくというのが一般的な姿である。であるから、俳句をとりあげる時には俳句とは何かが強調されるし、俳句の表現というときにも俳句独自の表現に焦点があてられることになる。しかし、ここではむしろ逆に、俳句も「優れた表現」の一つとして眺め、そこから抽出されてくる一般的な「優れた表現を生み出す型」に光をあてたいと思うのである⁹⁾。に通じるような「俳句」の指導を考えていくべきではないかと思うのである。はからずも生徒自身の鑑賞文に「秋の後すぐに冬が来るから、牧の木々が急いで葉を落としているのだということが、この一つの表現（落葉をいそぐ）からわかるので俳句らしいと思った。」と述べているように、もっと自在に「俳句」のそのものに入っていけるような指導の工夫が求められるべきだと考えるわけである。では、どのような授業が可能なのか。先にあげたような表面的な鑑賞にとどまらない「俳句」の授業はどうすれば実現できるのか、そのような考えを念頭において実施したのが以下の授業である。

III 「俳句」の物語化の相互批評の授業

「俳句」という表現が生徒の目の前にあるとき、それを自分の持つ言語能力でどのように理解していけるか、そのことが大切であることはいうまでもない。また最近の読者論の立場から、「俳句」は自身で何かを感じられればよしとしようとしている傾向があることも事実である¹⁰⁾。実際、私たちが「俳句」のみならず文学作品と出会ったとき、まず何かを感じて自分なりに「読むことの物語」¹¹⁾をその作品中に見出すことから始まるわけである。ただし自分の読みがはたしてどこまでの整合性や他に対する説得力を持つかということも気になるのも事実である。自分勝手な気ままな読みの世界を楽しみたいと思う一方、やはり自分の読みを他人とも共有できるような読みの世界として楽しみたいとも感じているからなのであろう。

「俳句」の鑑賞文を書かせて、生徒の読みを確実なものにしたり、評価に利用したりする授業例はいくつか見受けられる¹²⁾。ただし、ここで私が試みようとしたのは、生徒の「俳句」というものに対して固定化し硬直化してしまった読みを解放して、もっと表現それ自体と対峙していけるような授業なのである。これまで彼らが多く受けてきた「俳句」の授業の中でこり固まってしまった「俳句らしさ」を、何とかして自分たちの言葉の力で柔らかくし、豊かな表現行為に広げていくための方法として、「俳句らしさ」を再認識させた上での「俳句」の物語化を実施した。「俳句の物語化」については、すでに検討してあるが¹³⁾、今回はそれに相互批評を加え実践することで、生徒に読みの多様性を楽しませるのととどまらず、自分と他人の読みの可能性を比較検討することによって、より自分の読みを確実なものにさせていけるような授業を展開したわけである。

《授業の実際》

単元名「俳句を学ぼう」 対象 筑波大学駒場中学校 2年生

男子118名

実施期間 1995年10月～11月

第1時 俳句の歴史 なぜ「五・七・五」なのか

和歌から連歌 連歌から連句 連句から発句

「和歌」の中からどうして「俳句」が誕生してきたのかを概説した。

第2時 俳句らしい表現

(表1)の調査にあてた。

第3時～第6時 俳句の学習

「俳句らしさ」を中心として

(表1)で「俳句らしい」と生徒がとらえた句についてそれぞれの解釈をもとにして「俳句らしさ」として生徒たちが考えていたものはなんであったのかを考えさせた。

単に「取り合せ」「写生」「無季・自由律」という知識の習得にならないように配慮した。

(表2)はその結果である。

第7時 「三月の甘納豆」の物語化(200字)

生徒の評価がもっとも分かれた「三月の甘納豆のうふふふふ」の句を取り上げて各自で物語化させた。

第8時 「三月の甘納豆」の物語の批評

前回の授業の物語化をもとに他の生徒の読みと比較検討させ、良い点、悪い点の指摘をさせた。

第9時 「三月の甘納豆」の再物語化(600字)

前回の授業での指摘をもとに、自分が納得できた指摘を参考として再度物語化を実施した。

第10時 「十一月の甘納豆」の句作成

自分の物語化をもとにして、「十一時の甘納豆」の句の世界を考えさせた。

《生徒の実例》

{作品①}

今から何十年か昔、あるところに小さな女の子がいた。三月のひなまつりのころになった。まわりの友達とは色々なものを食べたりするというのに、その女の子の家では、そういう予定が何一つありませんでした。その子がかなしい思いで三月三日を暮らしていると、密然母さんから一つの袋を渡されました。その中には、少しでしたが甘納豆が入っていました。その子は甘納豆というお菓子を食することができ、とても喜びました。そして、母さんと「うふふふふ」と笑いながら楽しくひな祭りを暮らしましたとき。

〔批評①〕 ○は作品を書いた生徒が納得できるとしたもの

×は納得できないとしたもの

- ・さびしい雰囲気の中、お母さんが無言で甘納豆という「喜び」の袋を渡すところがよい。
 - ・少女とお母さんが一緒に笑うところに親子の気持ちを通じ合っている様子が表されていて和やかな雰囲気が伝わる。
- ×何か設定が当り前過ぎるような気がする。もう少し起承転結の全部の部分に意外性があると良いと思われる。
- 漢字の誤り、突然と密然となっている。暮らすより過ごすの方を使うべきでは。

〔完成作品①〕

今から五十年ほど前、第二次世界大戦中のある所に、一人の小さな女の子がいた。この子の家は戦争になる前は、少しではあったがひな祭りを家族みんなで祝っていた。でも、戦争がはじまってしまって、父親が戦争にとられてしまい、母と二人でくらししていかななくてはならなかった。戦争がはじまった年のひな祭りは、この戦争の暗い気持ちもとりはらおう、と二人だけだったが、祝った。でも、次の年、又次の年と生活に余裕がなくなってきて、祝わなくなってしまった。そして次の年の三月一日、その少女は今年も又、ひな祭りを祝わないのか、と残念に思っていた。その様子を見ていた母親は、どうにかひな祭りを祝ってあげたい、と思い、いろいろな所を探し歩いた。そして、とうとうあるだやし屋をみつけた。そこでひとにぎりの甘納豆を買った。そして三月三日の朝、少女が悲しい気持ちを母にさとられまい、としていたら、母が突然小さな袋を出した。少女はそれをみるととてもうれしそうに笑った。母もその顔を見ると、何か「うふふふふ」と笑いがこみあげてきた。そしてこの日は、二人で甘納豆を食べ、ひさしぶりの楽しいひな祭りを過ごした。

〔作品②〕

うちの近所の公園には、毎年三月頃にきれいな花を咲かせる梅の木がある。近所ではちょっと有名で、休日にもなると近所の人が集まって来るのだ。

その公園には梅の咲く時期だけ来て子供達に甘納豆をくれるおばあさんがいて今年も毎週来ていたのに、先週は一度も来ていなかったようだ。

でも、今日は来ていた。「こんにちは。」というと、いつものように笑って甘納豆をくれた。

〔批評②〕

- ・おもしろいところ
- まるで本当の話みたいに書かれているところが良い。
- 「梅の木」から入っているところがうまい。
- 「梅の咲く時期だけ来て、子供達に甘納豆をくれるおばあさん」という設定が、何となく強引だが、不思議な感じがしておもしろい。

・解釈としておかしいところ

○「おばあさん」が「笑って甘納豆をくれた」ところが「うふふふふ」なのだと思うが、にやにやというのと「うふふふふ」とではイメージが違う気がする。

○「毎週来ていた」や「先週は来なかった」とあるが、梅とはそんなに長い間花をつけるものなのだろうか。

×「先週は一度も来ていなかった」理由が全く書かれていなく、ストーリーの展開と関係ないと思った。

〔完成作品②〕

うちの近所の公園には、毎年三月ごろにとてもきれいな花を咲かせる梅の木がある。これが近所ではちょっと有名で、広くてきれいな公園と共に町の名物となっている。そういうわけで毎年この季節になると、どこからともなく人が集まってくるのだ。

私はボランティアでここ三年くらい掃除をしている。普段は二、三日に一度なのだが、梅の咲く季節には梅を見がてら毎日公園に来ることにしていた。

それと同じころ、毎年（すくなくともこの三年間）梅を見に来るおばあさんがいる。毎日お昼すぎに来ると、しばらく座っていてそばに来た子供達にうす桃色の和紙で包んだ甘納豆を配るのだ。いつでもにこにこ人良さそうな笑みを浮かべていて、私と会えばあいさつをして少し話をする位の顔見知りだった。そのおばあさんが今年も毎日来ていたのだが、今日はどうも来ていなかったようなのだ。どうしたのか心配だ。

翌日おばあさんが来たので、きのうはどうしたのかと聞くと、去年亡くなったおじいさんのお墓参りに行って、久しぶりに会って来ましたよ、と答えて「うふふ」とちょっとうれしそうに笑った。

甘納豆はおじいさんの好物だったそうだ。

〔作品③〕

むかしむかし、あるところに権平という百姓のせがれがおりました。権平は甘納豆に目がありませんでした。

三月のある日、権平は甘納豆を持って山に遊びに行きました。ところが、権平は山で甘納豆をこぼしてしまいました。権平は泣く泣く家に帰りました。

何年か後、権平はひよんなことからあの山に入りました。すると、なんと、まあ、そこにはたくさんのおあずきがなっているではありませんか。権平はそこにあずき畑を作りました。

権平はせっせと働きました。毎年多くのあずきが実りました。そして権平はそのあずきのおかげで大地主になりました。権平は、

「三月の甘納豆のうふふふふ」

とつぶやいたそうです。

〔批評③〕

・おもしろいところ

○主人公の名前を「ある男」などとせず、名前を具体化させた点と、甘納豆をこぼした所に小豆が出来、畑をつくって、毎年多くの収穫を得て、大地主になった点の二点はなかなか面白い点でした。(始めの点は自分の書いた点にはなかったのに、興味を感じ、面白いと思ったのでここに挙げました。)

・変だと思ったところ

◎山で小豆畑が出来るとは思えません。山へ遊びに行く点は良いから、それを尊重して「ところが、山へ遊びに行く途中の道に甘納豆をこぼしてしまいました。権平は山へ着いた時に初めてその事に気づき、泣く泣く家に帰りました。」にした方が良かったのではないかと、思います。(こうすると後の文も違って来るが、そのうち、始め直した方が良い点だけを挙げました。)

〔完成作品③〕

幸福を呼ぶ甘納豆

むかしむかし、あるところに権平という百姓のせがれがおりました。権平は甘納豆に目がありませんでした。

三月のある日、権平は甘納豆を持って山に遊びに行きました。ところが、権平は山へ行く途中の道に甘納豆をこぼしてしまいました。山に着いた時、権平はその事に初めて気づき、泣く泣く家に帰りました。

何年か後、権平はひよんなことからその山に行きました。すると、なんとまあ、以前甘納豆を落としたりしたところにたくさんの小豆がなっているではありませんか。権平は「おらはここに甘納豆を落としたりしたんか。」と思いました。

権平はそこに小豆畑を作り、せっせと働きました。毎年毎年多くの小豆が実りました。

そして権平はその小豆のおかげで大地主になりました。権平は

「三月の甘納豆のうふふふふ」

とつぶやいたとき。

めでたし、めでたし。

IV おわりに

生徒の俳句の物語化を相互批評させることで、生徒の中にある「俳句」に対しての硬直化した認識を改めることができ、生徒自らが主体的に「俳句」という表現に向かい合えるようになればと考え試行的授業を実践した。「俳句らしさ」を生徒自身が「つまらない」と多い込む原因が、多く行なわれている形式化した解釈中心の授業によるのではないかと考えたからである。しかし、だからといって解釈そのものを完全に授業から外して、すべて「三月の甘納豆のうふふふふ」のような多様な読みを前提とした俳句を指導すべきだというつもりはない。「俳句」を生徒の手から

離し、文学趣味の世界に閉じこめてしまうような授業を見なおすべきだといっているのである。生徒の相互批評の実態を見てみるとわかるとおり、生徒は型にとられることなく実に自由に「俳句」の世界に遊んでいるのである。中でも〔完成作品②〕の例などは、とてもよくその成果が出ているといえる。他人の批評をきちんと自分のものとして受け止め、自分の「読み」の世界を、立派に他の共有できる次元にまで高めている例といえよう。「うす桃色の和紙」やおじいさんの墓参りにいったための「うふふふふ」であったなどと書き改めているあたりは、その成果として大に評価したい。

しかし、このように自由に「俳句」をとらえていくことばかりをもっぱらに主張したいわけではない。「俳句」が形式の文学表現であるという一面も認めたくて、生徒の主体性と「俳句」という表現の形式の均衡を十分に配慮した授業を考えていくべきだと主張したいのである。「俳句」がなぜ俳句という表現を選択して成立しているのかをぬきにして、ただ単に表面的な形式だけの指導では生徒は納得していないことを教師の側も考えるべきだといいたいのである。その点を十分に認識したうえで、芭蕉の言葉にあるように「言ひおほせてなにかある」の世界を生徒に正しく理解させていくことは、とすれば他人の心を思いやり他人とのコミュニケーションが苦手な現代の生徒たちにとって、「俳句」という文学の教育にとどまらない大きな意味があるといえよう。相互批評の方法もその点において有効なのである。このように見てみると、「俳句」のもたらす課題は、古くて新しいものと言えるのではなからうか。

(筑波大学附属駒場中学校)

〔注〕

- (1) 浜本純逸・浜本宏子編『文学教材の実践・研究文献目録』溪水社 昭和57年10月 pp.209～210 同(三)溪水社 昭和62年7月 pp.223～224 浜本純逸監修『復刻版文学教材の実践・研究文献目録(一)』溪水社 昭和63年7月 pp.105～106によれば1967～1986年の「俳句一般」の実践研究として50例を数える。
- (2) 佐藤和夫『海を越えた俳句』丸善ライブラリー012 平成3.5 p.151によれば1964年に行なわれた全米ハイクコンテストには4万1千句の応募があったとあり、授業の中でハイクに親しんでいる人はゆうに100万人を超えるとのことである。
- (3) 鳴島 甫『俳句による“レトリック”原点からの指導』大修館書店 1992年12月 p.26
- (4) 坪内稔典「現代俳句の魅力—断片の美しさ—」『月刊国語教育』1992年12号 東京法令 pp.36～39
- (5) 山本隆春「読むことの教育に果たす現代批評理論の役割」『月刊国語教育研究』No257 日本国語教育学会 1993年9月 p.28
- (6) 小室善弘「草田男の『降る雪や……』の授業論」『月刊国語……』No175 東京法令 1996年1月 pp.14～17
- (7) 石塚 修・越田美砂子ほか「生徒一人ひとりが『多様な読み』を楽しむ授業の実践的研究」

『筑波大学大学校教育部論集』17巻 筑波大学大学校教育部 1994年3月 pp.95～108

〔付記〕本稿は平成7年度第3回日本国語教育学会言語部会兼第20回人文科教育学会（平成8年1月20日・於筑波大学附属中学校）での口頭発表をもとにしたものである。席上御助言・御指導いただいた方々に記して謝意を表す。

(表1)

調査対象 筑波大学附属駒場中学校 2年生 男子 118名 調査日 平成7年9月

〈平成五年版 中学校俳句教材一覧〉『月刊国語教育』No.135 1992・12 東京法令 20～21頁

	俳句	所収	頁	つま	かり	か	か	新
1	秋元不死男	鳥わたるこきこきこきと切れば	光3	0	3	1	6	0
2	芥川龍之介	元日や手を洗ひをる夕ごろ	3	3	1	4	0	0
3	飯田蛇笏	をりとりてはちりとおもきすきかな	学3	5	0	1	4	10
4		手の露連山影を正しうす	三3	3	0	0	2	5
5	石田波郷	バスを待ち大路の春をうたがはず	学3	0	0	1	0	1
6		雀らも海かけて飛べ吹流し	光3	1	0	0	1	1
7		噴水のしぶけり四方に風の街	教3	0	1	0	0	1
8	大野林火	あをあをと空を残して蝶分れ	光3	2	6	0	0	1
9	尾崎放哉	こんなよい月を一人で見て寝る	学3	8	6	15	1	1
10	桂 信子	立春の海よりの風海見えす	東3	0	0	0	0	3
11	加藤敏郎	かなしめば馬金色の日を負ひ来	学3	0	0	0	4	0
12		燕はや帰りに山河音もなし	教3	0	0	0	0	3
13		降る雪が父に言を齎しぬ	光3	3	0	0	2	0
14		鯨鯨の骨まで凍ててぶちきらる	三3	2	0	0	2	1
15	金子兜太	富士を去る日焼けし腕の時計澄み	東3	3	0	2	1	0
16	川端茅舎	初風の岩より舟に乗れと云ふ	三3	0	3	0	1	1
17	河東碧梧桐	赤い椿白い椿と落ちにけり	三3	0	2	1	0	1
18	木下夕爾	春雨やみなまたたける水たまり	三3	0	3	1	0	1
19	黒田杏子	白萩のひかけの椿をいま刻む	三3	0	3	1	0	1
20	芝不器男	卒業の兄と来てある堤かな	東3	0	2	0	0	0
21	高野素十	美しく春潮の航一時間	光3	2	1	0	2	0
22	高浜虚子	映りたるつつじに耕煙現れし	教3	2	0	0	0	2
23		桐一葉日当りながら落ちにけり	三3	1	1	0	0	0
24		春風や園志いだきて丘に立つ	学3	11	1	2	0	0
25		白牡丹いふといへども紅ほのか	光3	3	0	0	1	0
26	高屋窓秋	ちるさくら海をければ海へちる	光3	3	1	0	1	0
27	高柳重信	少年が跳ねては滅らす無花果よ	東3	2	0	1	1	0
28	種田山頭火	分け入つても分け入つても青い山	学3	7	7	2	1	0
29		歩きつづける彼岸花咲きつづける	三3	0	5	1	1	0
30		夕立やお地蔵さんもわたしもずぶぬれ	教3	16	7	7	0	0
31	坪内稔典	一月の甘納豆はやせてます	教3	1	4	0	6	0
32		河馬になる老人が好き秋日和	三3	2	0	1	4	0
33		河馬を呼ぶ十一月の甘納豆	教3	6	3	4	5	0
34		桜散るあなたも河馬になりなさい	教3	4	12	14	8	0
35		三月の甘納豆のつふふふふ	教3	3	15	18	0	0
36		十二月どうするどうする甘納豆	教3	3	6	0	4	0
37		水中の河馬が燃えます牡丹雪	教3	0	6	0	0	0
38		二月には甘納豆と坂下る	教3	2	2	0	2	0
39	永田耕衣	友来たるもつとも暑き夕べかな	東3	0	5	1	0	2
40	中村草田男	諸手をし入れ泉にうなづき水握る	東3	0	2	1	0	0
41		少年の見遣るは少女鳥雲に	教3	2	0	0	6	0
42		冬の水一枝の影もあざむかず	学3	2	1	2	0	4
43		葡萄食ふ一語一語の如くにて	光3	1	0	1	3	5
44	中村汀女	万緑の中や吾子の歯生え初むる	光3	1	0	4	1	3
45		とどまればあたりふゆる鱧かな	三3	1	0	0	0	10
46		外にも出よ燃るるばかりに春の月	学3	0	1	0	0	0
47		咳の子のなぞあそびきりもなや	三3	4	1	6	0	0
48		靴紐をむすぶ間に雪つぶて	教3	4	0	3	0	1
49	野澤節子	はじめての雪間に降り闇にやむ	東3	2	4	17	0	0
50	橋本多佳子	いなびかりより北より北を見る	光3	9	4	0	0	0
51		星空へ店より林檎あふれをり	学3	4	1	2	0	0
52	星野立子	小鳥来て何やら楽しも忘れ	教3	2	1	4	0	0
53		喇をこぼさじと抱く大樹かな	光3	0	0	0	1	2
54	正岡子規	いくたびも雪のふかさを尋ねけり	学3	1	0	2	1	9
55		島々に灯をともしけり春の海	三3	1	0	0	1	6
56	松本たかし	山清水さやくまに聞き入りぬ	教3	1	0	1	0	0
57	水原秋桜子	啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	学3	0	0	0	0	16
58		冬菊のまとふはおのがひかりのみ	光3	4	0	0	0	3
59		妻秋の中なるが悲し聖魔墟	三3	0	1	0	0	3
60	三橋敏雄	この山の鳥居の立てる冬田かな	教3	1	0	0	0	4
61	村上鬼城	花散るや耳ふつて馬のおとなしき	三3	0	1	0	0	3
62	森 澄雄	稲雀散つてかたまる海の上	東3	0	1	0	1	3
63		雪国やはつはつはつ時計生き	光3	3	1	0	4	0
64	山口誓子	(はたはた)は少女の指にやはらかき	三3	0	1	0	3	0
65		かりかりと蟬蜂の(かほ)を食む	学3	0	1	1	2	0
66		一点の偽りもなく青田あり	光3	0	1	8	0	1
67		風雷にたわむアンテナ声を聴く	教3	1	2	0	1	0

光…光村 学…学校図書 東…東京書籍 教…教育出版 三…三省堂

